

まだ見ぬ 科学者 たちへ



博士からの伝言

▷ ③ ◁

「二つの分野を究めることはある意味で楽。専門があると安心だから。今はいろんな分野を理解して統合し、新分野をつくるセンスが必要だ」

タンパク質の1分子を計測する技術を開発し、筋肉が動く仕組みを明らかにした柳田敏雄さん(67)。現在、神戸にあるスーパーコンピューター「京」を使い、医療や創薬に役立てる計算生命科学の研究も指揮している。

丹波市春日町出身。理科や数学が得意で、大阪大では電気工学を専攻した。「これからは半導体の時代といわれ、卒業生は金の卵。企業から引く

大阪大学特任教授

柳田敏雄さん

やなぎだ・としお 理化学研究所生命システム研究センター長、脳情報通信融合研究センター長を兼務。両センターで多分野の研究者約400人を率い、生命現象の解明に挑む。

手あまただった」。自身も修士課程を修めた後、電子部品メーカーのエンジニアになった。だが「半導体分野はトレンディー(最新流行)。言い換えれば基礎は解明されてしまっている。僕

社した。

はもっと謎が多いことを研究したい」と1年で退任した。そのころ、筋肉が動く仕組みについて英国の研究室に飛び込んだ。そこ

ーベル賞学者が、ミオシンというタンパク質が首を振って移動する「首振を覆した瞬間だった。その後、ミオシンはふらふらと動き、最適な場所を探して移動することが分かった。

怒られたが、大阪大大学院にある生物物理学の研究機のように動くななんて得できなかった」。そこで「ふらふらとあいまいなのが生き物の魅力。一筋縄よりいろんな経験を

した方がおもしろい」。分子の揺らぎになぞらえ人生観をひょうひょうと語った。(藤森恵一郎)



「リーダーに必要なのは成功体験。細かく指示をせず、大きな方向性だけ示すことも大切」と話す柳田敏雄さん＝大阪府吹田市、脳情報通信融合研究センター(撮影・神子素慎一)

新分野 開く センス 養え